《卒業研究報告》

踊るホームレス
「俺たちだって生きている」

甲斐　玄哉（竹峰ゼミ）

序章

１節　ホームレスとは

2022年3月、昼下がりの新宿駅東口で、人が行き交う路上の端で雑誌を売っている初老男性が「ビックイシューどうですか」と声をかける。冬にも関わらず、サンダルで、服も綺麗とはいない。シワも汚れも目立ち、暖かいとは決して言えない服装である。

2023年8月、夕日が差し込む代々木公園で、40年代の男性がシワも汚れも目立つ服装を着て、屋外にもかかわらず裸足であった。決して上手いとは言えない個性的なダンスを踊っている。NIKEの靴を履き、流行りのヒップホップ音楽を流している隣の20年代のおぼしき若者とは、全く別物のダンスであった。

この人たちは生きるために、「私はこういう人間です」と世の中に表現している。荷物を抱え、時にはサンダルで、髪の毛も長いままである。それでも毎日、毎日必死に何かを伝えようと生きている。だが世間では、この人たちのことを「ホームレス」と呼ぶ。

なぜなら彼らは路上にダンボールを敷いて寝たり、ブルーシートで仮設の家を作って路上で寝泊まりをしているからだ。確かに2002年に公布された「ホームレスの自立の支援等に関する特別措置法」はホームレスを「都市公園、河川、道路、駅舎その他の施設を故なく起居の場所とし、日常生活を営んでいるもの」と定義する。厚生労働省の調査結果にあがってくるホームレスの数は、この「定義に当てはまるホームレス」を目視調査で割り出したものである。2023年1月に実施された厚生労働省によるホームレスの実態に関する全国調査によると、ホームレスの数は3,065人であった。ホームレスが確認された自治体は234市区町村であり、都道府県単位だと最もホームレスの数が多かったのが大阪府の888人で、2位は東京都の661人、３位は神奈川県の454人が続く。

この厚生労働省の調査結果によると、毎年ホームレスの数は減少し続けており、昨年2022年度調査と比べると383人減少している。緊急一時宿泊施設の設置など各自治体でのホームレス対策が進んだことや、生活保護制度を利用する人々の増加、さらに移動型のホームレスの人々が増え、調査不能の人々が増加したことなどが、厚生労働省の調査で理由に挙げられている。

確かにホームレスの数は統計上、年々減少してはいる。しかし、こうした路上で生活を営んでいる人たちだけが、ホームレスなのだろうか。ホームレスとは言葉の意味をたどれば、「家がない」ということを表す。もともと居住して生活を営んでいた場所を何らかの理由で喪失し、その結果、本来住居することが前提とされていない、社会的に容認されていない場所に居住して生活を営まざるを得ない状態である。厚労省の調査で数えられるホームレス以外にも、帰るべき家を持てない人々が数多くいる。荷物を持ち歩いて、ネットカフェに泊まったり、一時的なシェルターに避難していたり、知り合いの家を泊まり歩いて生活して

いる人々も増えてきているのが現状である。

ホームレスとは、路上生活をしている人だけではないのだ。住宅を通して広がる地域住民としての、また職場に帰属する働く人としての、さらに家族の一員としての、社会集団への帰属の喪失状態にある人たちも、ホームレスといえる。日本では戸籍という形で国家に掌握され、戸籍で日本国民という帰属性を獲得し、住民として分けられる。住所があることで、住民としての地位とこれに付随した権利義務を獲得するのだ。しかし住所がない人たちもいる。つまり、この論文ではホームレスを住むべき場所を失ったと同時に、社会的な意味での生きていく場所を喪失した状態にある人たちとしてとらえていく。

２節　ホームレスが生み出された社会的要因

「世界第3位の経済大国」ともいわれる日本社会でホームレスの人々はなぜ生み出されるのであろうか。この要因は、日本の雇用や失業問題と強く結びついている。仕事をしていたが、リストラや個人の健康状態など、様々な理由で辞めざるを得なくなった人々が次の仕事に就けずに、失業状態から抜け出せない日々が続き、所持していたお金も底をつき、路上生活せざるを得なくなる。これが日本でホームレスになる一番の原因である。

ホームレスは中高年の男性が多かった。主に土木建築業に従事してきた日雇い労働者で、年齢と共に仕事がなくなったり、体調を崩したりして、再就職できなくなった人たちである。日本の高度経済成長が終わり、バブル経済がはじけ、日本が情報化社会に突入した頃、これまで土木建築業に勤しんできた人々は時代に取り残されてしまった。また、現在60歳前後の日雇い労働者の多くは、地方から出てきた人たちでもある。農家などの長男は、土地や財産などを守るために実家を継ぐが、それ以外の子どもは、仕事を得て食べていくために、都会に働きに行かざるを得なかったのだ。これは、日本の労働者全体に当てはまる構図である。時代と共に仕事がなくなっていく人々には、住むべき家もなければ、帰る故郷もなくなっているのである。

2008年9月15日にリーマン・ショックが起きて以降、日本でのホームレスの様相が変化し始めた。リーマン・ショック以降の世界同時不況、大企業によるリストラ断行、派遣の雇い止めなどにより新たな問題が起き始めたのだ。それが「ホームレスの若年化」である。ホームレスが雑誌販売を通じて自立図ろうとする「THE BIG ISSUE でも毎年、販売者が低年齢化している。販売者登録をした人の平均年齢は、2007年に50.5歳だったが、2009年には、41.0歳にまで下がっている」（飯島2013:27）と、『ルポ 若者ホームレス』のなかで著者の飯島裕子は述べている。新聞が100年に1度の経済不況と連日のように報道し続ける中、リーマン・ショックを機に日本では、ホームレスが若年化したのである。

では一体どれくらいの数の若者ホームレスが存在しているのだろうか。先に厚生省のホームレスの実態に関する全国調査では数えられないホームレスがいることを述べたが、それにも増して若者のホームレスの数をとらえるのは困難を伴うことである。なぜなら、若者ホームレスは、不可視化された存在だからだ。中高年ホームレスとは違い、路上生活を営んでいないケースが極めて多い。ネットカフェ、漫画喫茶、ファーストフード店、サウナ、個室ビデオ店など路上以外にも目に見えにくいホームレスは存在し、ホームレスの形態は多様化しているのである。厚生労働省が、2007年に実施した住居喪失不安定就労者などの実態調査報告によると、ネットカフェや漫画喫茶などで寝泊まりをする住所喪失者、いわゆるネットカフェ難民と呼ばれる人たちが推定約5400人いるとされた。しかし、不可視化された存在が故、いまだに、この若者ホームレスの正確な数は出せてはいな

い。

若者ホームレスは増加傾向にある。しかし、まだ若年層向けの福祉対策が整っていないのが現状である。日本では、高年齢層や世帯向けの福祉はある程度整備されているが、単身の若年層は、そもそも福祉の対象として想定されていない。そのため、若者がホームレス状態に陥ってしまったときに、申請できるような福祉サービスは生活保護しかないのである。

ビッグイシュー日本を設立した佐野章二は、『ビッグイシューの挑戦』の中で、「人が屋根のある生活から路上への生活になるには三つの過程がある」(佐野 2010:138)と指摘する。第一段階が「仕事を失う」、第二段階が「家を失う」、第三段階が「人との絆を失う」。この三つの過程を経て人は「ホープレス(hopeless)」すなわち希望を失い、ホームレス(homeless)」になっていくと、佐野は指摘する。

人は仕事を失ったとしても、家を失ったとしても、周りに支えてくれるような、頼れるような家族や友人などの様々な人とのつながりや絆があれば、人々はそう簡単にはホームレスにはならない。人々がホームレスになる時、それは未来への希望「ホープ(hope)」を失った時である。支えてくれる人、頼ることができる人とのつながりが切れてしまったときに人々は「ホープレス」となり、その状態が続いてしまった結果、居場所であるホームを失い、ホームレスになるのである。

３節　表現するホームレス

社会集団への帰属を喪失し、「ホープレス」の状態になるなかで、ホームレスの人々はどう生きているのであろうか。一人ひっそりと路上で生活をし、ダンボールのうえで寝たきりの生活を送るなど、何もしてないホームレスを多くの人は想像するだろう。しかし冒頭で紹介したように、元の生活に戻ろうと、私は「ホームレス」ですと自らを受け入れ発信している人たちがいる。「表現するホームレス」とこの論文では呼ぶ。

ダンスを踊ったり、雑誌を売ったりする表現するホームレスは、何を世の中に訴えているのだろうか。この論文では、路上でダンスを踊っている、表現するホームレス「新人Hソケリッサ」に注目し、かれらの表現からわたしたちは、何を読み取ればいいのかを明らかにしていくことが、本論文の目的である。ホームレスの表現活動に注目することを通じて、ホームレスという存在をわたしたちはどうとらえていけばいいのか、ホームスレスという存在を問い直していく契機としていく。

新宿区にあるホームレス支援団体「スープの会」の事務所である、やまぶき舎に足を運び、大学３年次から代表である後藤浩二さんに出会い、ホームレスの実態についてお聞を繰り返し聞いた。その中でビックイシューとソケリッサという団体の話をしてくださり、興味も持った。実際にソケリッサのメンバーに会えないかと思い、調べて行き、ビックイシューの販売をしている人の中にソケリッサの経験者がいることを知った。そこで、ビックイシューの販売員に話しかけ、ソケリッサのメンバーについての情報も教えてもらい、実際にソケリッサの元メンバーである柳沢俊太郎さんにインタビューを行うことができた。

こうして出会った柳沢さんのライフストーリーを軸に本論文は３章からなる。1章は柳沢さんがホームレスになるまで、２章ではホームレス生活のどん底と希望、３章では、ソケリッサとの出会いと活動、終章では、柳沢さんの生き様や、表現するホームレスの世の中に伝えたいことを明らかにし、結論を導いていく。

第１章　まさか自分がホームレスになるとは

１節　楽しかった日々

新宿駅から少し慣れた中央公園で寝起きをして

いる茨城県結城市で生まれた柳沢俊太郎さんは、ビックイシューを片手に笑顔で立っている。ずっと横になっているホームレスとは違い、忙しそうである。「山に囲われて、鬼怒川なんていう怖い名前がついた川がある。少し上に進めばすぐ栃木県なんだよね。東京に比べては高い建物なんて１つもないけど、川の音が心地良い、いい場所だよ」と生まれ故郷の話から柳沢さんは始めてくれた。

柳沢さんは３人兄弟の真ん中に生まれた。ごく普通の５人家族で仲良く暮らしていた。貧しいわけもないが、裕福ではなかった。しかし弟が生まれてすぐ、父は姿を消したという。女手ひとつで3人を育ててくれた。

小学校では宿題や夏休みの提出物を出さずによく先生に叱られた。親に渡さなければならない手紙などもよく忘れていた。放課後は近くの公園で鬼ごっこ、鬼怒川で水遊びをよくしていた。中学生になると野球部に所属し、毎日汗を流していた。「相変わらず、宿題や提出物は出さず、テスト勉強もほとんどやっていない」と笑顔で話してくれた。私自身も野球を長年やっていたことを話すと、お互いの監督の悪口や監督の口癖など、野球をやったことがある人にしかわかない話で盛り上がった。

高校生になると、野球をやめた。高校も工業高校を選び、アルバイトもしていた。なぜ工業高校を選んだのかと聞くと「頭なんてよくないし、弟と兄は優秀で大学を目指していた。私は、はなから大学なんて意識もしてなかった。母からは大学なんていいから早く働きなさいと言われた。兄弟二人と比べてそういう面では私には期待してなかった。だから早くお金も稼いで少しでも兄弟より１歩リードしたくて、母を少しでも楽にしたく、野球もやめたし、工業高校を選び、アルバイトも始めた」と答えてくれた。兄弟に対する格差というものが、今でも心に残っている。

高校卒業後、兄弟より先に仕事についた。茨城県内の小さな工場だった。家から通っていたが、もうほとんど兄弟との会話はなかった。工場では上司や同期に恵まれて、充実した毎日だった。家には帰らず、友達の家に泊まる日々だった。「今思えば楽しい毎日だった」と柳沢さんはふりかえる。

４年間働き、憧れていた東京に引越した。その時、母親が柳沢さんに言った言葉を聞かせてくれた。「東京に行ってどうするの？あんたには、無理よ。一人で生きて行くことも、東京で仕事をするのも」。そう母親がいう言葉に腹が立ち、絶対に見返せてやると思い、東京の中野に引っ越した。新しいことを始めようと東京に来た。なぜ4年間も働いた工場をやめてまで新しいことに挑戦したのかと聞くと「23歳になる歳、世の中私の同級生たちは大学を卒業していわゆる新社会人になる。その節目に私自身を置いていかれるわけにはいかない。特にやりたいことはないが、その節目に挑戦できるものはないかと思い、東京に来た」と、上京してきた動機を柳沢さんは気持ちのこもった声で語る。好奇心旺盛なところや何事も挑戦する姿は、この時からのものだと感じた。

２節　崩れかけていく生活

茨城に生まれて22年間すごし、2000年代前半の年、東京に飛び出してきた柳沢さんにとって、大都会は始めての経験だった。人の数、建物の大きさ、全てが初体験だった。が、特にやりたいこともないまま、アルバイトをしながら仕事を探していた。家は中野にある小さなアポートであったが、一人で住むには十分であった。

２ヶ月が経ち、東京にも少しは慣れてきた。だが結局２ヶ月間で定職は見つからず、最初に就いたアルバイトもやめていた。知り合いもいなければ、話す相手もいない。そんな中、中野で新しく居酒屋のアルバイトを始めた。この居酒屋のアル

バイトが柳沢さんを少しずつ崩していくのであった。

何もわからないまま、始めたものの、店長や大学生アルバイトに恵まれ、すぐにお店に馴染んでいく。何より、同い歳の大学生Aとすぐに仲良くなり、シフトも一緒に入るようになる。「東京にきて初めての友達、歳も同じで、話も合う。大学生とフリーターだが、アルバイト以外でも会い、遊ぶほどの人だった」とAさんのことを柳沢さんは話す。Aの家にも泊まるようになり、パチンコや競馬、大人の夜の遊びなど、慣れない東京生活に花を持たせてくれた。茨城の工場で働いていたときのように、毎日が充実していた。

だいぶ東京に慣れ、アルバイトも役職がつくまでにもなった。アルバイトが楽しく、フルタイムの仕事を探すこともしなかった。本来の目的である新しいことへの挑戦にはほど遠かった。母親にも一切の連絡をせず、茨城に帰ることもしなかった。アルバイトで貯めたお金はタバコ、お酒、パチンコ、競馬、ガールズバーで消えていく。だんだんアルバイトも雑になっていき、他のアルバイトからは煙たがれる。しかしそれでも、最低限の仕事はそつなくこなし、アルバイトに入る日数は多かったため店長からは好かれていた。同い年のAも同じであった。Aは浪人と留年も重ねていたため、大学には友達がいなかった。Aの地元でも同世代は皆社会人になり、遊ぶ友達などいなかった。だから柳沢さんとAは常に一緒にいた。お金がぎりぎりの時にだって、二人は笑顔で話していたほどである。

24歳の夏ごろ、いつものようにAとシフトに入りアルバイトをしていた。その日は給料日であった。二人は仕事を終え、給料を握りしめていた。給料をもらった日には、柳沢さんはAに恒例であったガールズバーに誘った。だが、Aは珍しく首を振った。「それよりお前の家で飲もうぜ」とAが誘ってきた。柳沢さんはもちろん大歓迎であった。その夜お酒を飲み、Aといつものようにくだらない話で盛り上がった。しかしその夜が、Aとすごした最後になった。

お酒が残るまま翌朝10時ごろ、柳沢さんは目覚めた。そこにはAの姿はない。見覚えのないほどに部屋は散らかり、昨日酔いすぎたのかと思っていたが、明らかに空き巣が入ったかのようだった。柳沢さんは青ざめた。給料がないことに気づいたのだ。Aが盗んでいたのだ。電話が家にないため、アルバイト先の電話を使用して連絡をしたが、繋がらない。Aがお金、さらに家にある金目になりそうものをとって逃げていってしまった。「信頼していた唯一の人間に裏切られて涙がたまらなかった。お金を盗まれたことよりも、Aがそんなことをしたことがショックだった」と引きつった顔で語る柳沢さんから笑顔が消えていた。

タバコ、お酒、パチンコ、競馬、ガールズバーで、貯金もなくすっからかんになっていたところで給料を全て盗まれてため、生活費がない。ショックが尾を引き、アルバイトをサボる日々が続く。たまにいくが他のアルバイトとはうまくいかず嫌われていく。仕事に身も入らず前よりもっと雑になる。声も出ない、グラスは割る。唯一の助けだったAはもういない。挙げ句の果てに居酒屋をクビにされた。

３節　気付かされた今の置き場

秋ごろ、Aにお金を盗まれ、挙げ句の果てに居酒屋アルバイトをクビになってからの柳沢さんは何もやる気がなくなってしまった。毎日、何もせず寝てるだけが続く。当然お金はない。当たり前だが、電気代、水道代と言った光熱費が払えなくなっていく。お金がないことはわかっているのに、身体が動かない。やる気は起きず、寝てる。ガスも止められ、水も出ない。とうとう電気も止められ、薄暗い中の生活が続く。それでもなお何もしない。家にある物を中古品の買取店で売り捌いて、

少ない食料をコンビニで買う。やっとの生活であった。中古品の買取店で稼いだお金は底をつき、秋ごろ、ついには家賃が払えず、家を追い出される。その時の柳沢さんは「なんとかなる、きっと大丈夫」と思っていた。

もう何日も風呂に入ってない。まともな食事もしてない。公園の蛇口から出る水が命の繋ぎであった。寝るのも公園、起きるのも公園、毎日外を歩くだけ。自動販売機の下から小銭を探し、スーパーで段ボールをもらう。そしてまた違う公園で寝る。

段ボールを毛布がわりにして寝てから５日後、その日も同じように外を歩いていた。柳沢さんと同じように、公園で段ボールを引いて寝てる人を目にする。「なんだか安心した、同じ人も見て」と柳沢さんは路上生活の現実をまだ知らなかった。しかし話してみると、その人はもう何年もここで段ボールを引いて寝てる人だった。柳沢さんは驚きを隠せなかった。

「あんた、その段ボールだけで冬は乗り切れないよ」。ある男性が柳沢さんに話しかけてきた。格好はサンダルで、髪の長い老人であった。柳沢さんは「大丈夫、大丈夫です」と答える。それもそのはず、柳沢さんは「こんな生活すぐ終わる来週には元に戻っている」と甘く考えていた。しかし世の中そんなに甘くはなかった。

甘く見ていた柳沢さんだが、サンダルで、髪の長い老人に話かけられてから、次の週、また次の週と月日が経っていく。生活は変わらない。アルバイトを何か探すこともなく、段ボールを引いて、公園で寝る日々が続く。

気温が下がり、段ボール１つでは肌寒くなっていく。到底段ボール１つでは凌げない寒さに震える日々が続く。「あの時、老人の言うことを聞いていればこんなことになってはいない」。「アルバイトを続けていたら」、「Aに出会ってなければ」、茨城の「工場をやめて東京に出てこなかったら」……と、言っても意味のないタラレバを一人でつぶやいていた。「自分がいけないのはわかっている。母親の言うとおりだった。東京で一人で生きていくことなんて……、どうしていいかもわからずにいた」と柳沢さんは言う。

親友に裏切られ、仕事をなくし、家を無くし、段ボールを引いて公園で寝てる日々が続く。そう柳沢さんはホームレスになっていた。

「まさか自分がホームレスなるなんて、茨城を出た時は想像もしてなかった。アルバイトをクビになった時も、なんとかなると思っていた。だけど、またアルバイトをして、Aのように裏切られたらどうしようと心の中で思っていた。ようするにビビっていたんだよね。それを理由に何もせず、寝ていたら、まさかのホームレスになるはね。結局自分が悪かった、甘く見ていた」と、Aを攻める柳沢さんの姿は一切なかった。

２章　ホームレス生活のどん底と希望

１節　慣れてはいけない生活

ホームレスになってから初めての冬を迎えた。段ボール１つで生活していた柳沢さんはもうそこにはいない。中野の同じ公園に住むホームレスから薄汚れてた布団をもらい、冬も耐え凌いでいた。靴も服も決して綺麗とはいないが、ほかのホームレスに比べるとサンダルではない上に、服も破れてはいない。

同じ公園には柳沢さんのほかに3人のホームレスがいた。その１人が布団をくれたBだ。Bのホームレス生活は長く、もう7年もホームレスであった。爪は長く、足は黒い。靴はサンダルで、服は黄ばんだ破れている服で、髭は長く、髪は白髪混じりであった。柳沢さんはBと出会ったとき「私もこうなるのかな、さすがに７年は……」と思っていた。

ホームレスになってしまった柳沢さんのことを

Ｂはよく気遣ってくれいた。少ない持ち物の中から見知らぬ男に寒いからと布団を渡したり、「ホームレスが生きてる上に大切なことを教えてくれた」と、柳沢さんはBに感謝する。「炊き出し」というのも教えてくれたのもBだった。「炊き出しは月に１回、ボランティアらしき人が公園に来て出してくる」炊き出しは、「ご褒美」で「心の支えだった」と柳沢さんは言う。毎日ほとんど公園の蛇口から出る水しか口にしてなかった柳沢さんたちからすれば、温かい汁物におにぎりは生きる活力となる食事だった。初めて炊き出しを口にした時の柳沢さんは「ホームレスになってからというか、アルバイトをクビになってからちゃんとしたご飯は初めてだった。ましては温かい汁物。食べた時思わず涙が出た。おいしいと言う涙と、こんな生活で必死に生きている自分に情けなくなっての涙」だった。

Ｂからはアルミ缶集めも教えてもらった。アルミ缶を集めて潰しビニール詰めて業者に買い取ってもらう。お金になると聞いて、柳沢さんはすぐに集め始めた。公園の内はもちろん公園の外にも飛び出し集めた。毎日寝てるだけだった日々に、ほんの少しだけ楽しみが増えた。しかし現実は甘くはなかった。30個を集め、どれくらいのお金をもらえるかと期待していたが結果は15円だった。柳沢さんはがっかりした。1日アルミ缶をさがしてたったの15円。それもそのはず１キロで約60円もらえるが柳沢さんは約250グラムだった。「アルバイトをしているときは1日働いたら、6000円はもらえてたのに、お金も稼ぐって簡単じゃない」。だが、これを毎日続ければアルバイトの時よりははるかに少ないが、お金がもらえる。そう思い柳沢さんはアルミ缶集めを続けた。

アルミ缶は毎日たくさん落ちてるわけではない。そう簡単にお金は貯まらない。しかしアルミ缶集めをしていた柳沢さんには買いたいものがあった。それはビールである。ホームレスになってから一口も口にしてない。アルミ缶集めを初めて１ヶ月、やっとの思いでビールが買えた。公園のベンチ、夕陽が落ちる頃ビールを流し込んだ。「最高だったね、１ヶ月アルミ缶拾ってやっと飲めたし、ホームレスになってから初めて飲んだから謎の達成感があった。東京にきたときには毎日のように飲めていたビールなのにね……」と感慨にひたりつつも、また「自分が情けない」とも感じたと言う。

情けない、早くこの生活から抜け出したい気持ちはあるが、どこか甘えてしまう。これでも生きていける。なんとかなっている。そんなホームレスの生活に慣れていった柳沢さんであった。

２節　味わったことのない苦痛

路上生活は3年目を迎え秋ごろ、柳沢さんは、すっかり元の生活には戻ることを諦めていた。靴はサンダルで、服は破れていて黄ばんでいる。粗大ゴミの山から盗んだという綿が見えているダウンジャケットを着て寒さを防いでいた。虫食いが目立つ薄っぺらい布団に、黒ずんでいる毛布で寝る。多くのものが汚い、そして誰かが使わなくなってゴミにしたものをゴミ置き場から取ったものであった。爪も長く、髪は軋んでいて、手足が黒ずんでいる。3年前ホームレスになってしまったときお世話になったBのように、柳沢さんはなっていた。「月日が経つにつれてなんかどうでもよくなってきたんだよね。元の生活になんかどうせ戻れない、働くことも人と関わることも嫌になったんだよね」と、アルミ缶集めも面倒くさくなって辞めた。

ホームレスになってから1年近く経った時に、Bとも出会った中野の公園にはいられなくなった。柳沢さんら路上生活者が公園にいることに苦情が入り、段ボールも布団も全てを公園から「駆除」された。路上生活者がいると公園の雰囲気、街が汚いと思われるという苦情であった。Bとも

別れ、それっきり会うことはない。公園を追い出され、どうでもよくなってきたという。

寒さが厳しい冬に汗や独特匂いが目立つ夏を経験し、他の公園やガート下を転々とし中野の公園を追い出せれてから、2年近くたった。この時の柳沢さんは「もうあの時は酷かったね、知らないホームレスと酒飲んだり、タバコの吸い殻を集めて匂いを嗅いだり、神社であった祭りの次の日にお金を探しにいったりした。人通りが多いところの真ん中で段ボールや毛布を広げて道も歩く人に見せつけてたときもあった。ようするに邪魔みたいなこともしてた。今でいうと、東横キッズみたいなことだね。自分が言うのはあれだけど、地獄絵図だね」。そんな「地獄絵図」のようなホームレス生活を柳沢さんは中野の公園を追い出されてから2年ほどしていた。

ホームレス生活が始まってから３度目の冬が来た。いつものように新宿の公園で朝を向かえたが、体の震えが止まらい。今までにない頭の痛み、異常な寒さ、起こしたくても起きない体、いままでになかった苦痛の連続であった。咳がでる、いつもより寒い、ちょっとした頭痛は、いままでにもあった。その時は1日寝ていれば治る。だが今回のはレベルが違う。助けを求めたいが声も出ない。何より寝ているだけだと他の人は思い込んでいる。大丈夫ですかなんて声をかける人も当たり前だかいない。そんな苦痛が5日間続いた。

「あの時は信じられないくらい寒かったね。ほんとに死んだかったと思った。目の前が真っ暗にもなったし、息が荒くもなる。トイレに行きたくてもいけないから、寝たまました。ほんとにこのまま人生が終わると思った。それになんでこんな生活してるんだろうと自分を殺したくもなったね」。五日間の地獄を味わい、やっと起き上がれたが、苦痛はまだ残っている。自動販売機の下に潜りかき集めたわずかなお金を全て使い、風邪薬を買った。「風邪薬買うのにこんなに苦労したのは初めてだね。お金面も行動面でも。ほんとにこの時にもとの生活には戻りたいと思ったね。もうこんな苦痛も地獄も２度とみたくない」。柳沢さんはホームレスになってから初めて味わったことのない苦痛と地獄に直面して、元の生活に戻りたいという気持ちが芽生えた。

３節　希望の光、「THE BIG ISSUE」との出会い

味わったことのない苦痛からおよそ１ヶ月、体調もよくなり、いつものように新宿の公園で朝が向かえられる日々が戻ってきた。毎日寝てるだけでなく、何かできないかと、アルミ缶集めを再開した。「少しのお金だがずっと寝てるよりはいいし、もしまた体調を崩した時や他のホームレスが同じ状況になった時にも必ず必要になってくるから」と自分だけでなく、他人を気遣う柳沢さんの優しさがあった。

ある日１ヶ月に１回の楽しみである炊き出しを食べ終え、柳沢さんは、たまたまいつもと違うルートで公園に戻った。その途中、新宿駅前の人通りが多いところで雑誌を売っている人を見かけた。近づいてみると、靴は汚れていて、決して綺麗とはいない服装である。自分とは違うが、いわゆるホームレスに見えた。その日は話かけずに公園に戻った。しかしあの雑誌を売っている人が気になり、次の日も再び向かう。だがその人の姿はなかった。また次の日に駅に向かうと、別の人が同じ雑誌を売っていた。最初に見た人よりも明らかにホームレス感が強く、まるで自分を見ているようだった。

その人が雑誌をしまい移動しようとした時に、柳沢さんは話しかけた。まるで自分と同じような匂いがしたため話かけやすかった。売っている雑誌の詳細を聞くと「『THE BIG ISSUE』だ」という。そして「あなたは家がなく、公園やガードしたで生活してる路上生活者、いわゆるホームレスですか」と、柳沢さんが聞くと「そうです」との

答えが返ってきた。その時、柳沢さんは同じホームレスだったことに思わず笑顔が溢れた。

ビックイシューを売っているホームレスに興味を持ち、さらに話を聞く。するとTHE BIG ISSUEの事務所を教えてくてた。その日は公園に帰り、次の日教えてくれた事務所に向かった。「あの日の夜は少しだけワクワクしたね」と柳沢さんは人生の転機になった日のことを思い出す。

新宿にあるTHE BIG ISSUEの事務所に訪れ、説明を受けた。THE BIG ISSUEの販売者になるための条件は、ただ一つだけであった。それは「ホームレス状態にあること」である。つまり、定まった住居がないということを意味する。柳沢さんはもちろん条件を満たしていた。その場で10冊をもらい、明日から販売することができる許可を事務所ですぐにもらった。

次の日、10冊のビックイシューを売るのではなく、1日かけてそのもらったビックイシューを読んだ。「雑誌を売るのに、その雑誌の中身、内容も理解していなかったら、売れるわけない。だからまずは雑誌を1日かけてじっくり読む。その読んだ雑誌は売らない、１０冊が９冊になってもいい、それぐらい大事なこと。初めてビックイシューをもらった日からずっと続けている」と、９冊を確実に売るために、自分が読むことを柳沢さんは欠かせない。

ビックイシューを初めて売りに新宿駅に向かう。なかなか買う人が現れず駅前で売る人たちを見ていた柳沢さんだったが、中身の内容を理解しているため、９冊全てを１週間で売ることができた。それ以降も月２回発行されるビックイシューを事務所に購入しに行き、１冊をじっくり読み、ビックイシューを売り続けた。「アルミ缶よりお金はもらえたし、何より買ってくれることが嬉しい、頑張ってくださいと声をかけてくてる人もいて、売ることが楽しい。工場で働いている時や居酒屋アルバイトをしてた時のような感覚であった」。「THE BIG ISSUE」との出会いは柳沢さんにとって、まさに希望の光であった。

３章　「踊る」とうい表現で世間に伝えたいこと

１節　「新人Hソケリッサ」との出会い

2010年代半ば、柳沢さんは新宿や中野の公園や駅前でビックシューを売る日々を送っていたビックイシューを売り始めてから３年ほど経ったことだった。すっかりビックイシューで稼いだお金でお酒やタバコを買えるまでにもなった。しかし、路上生活からは抜け出せない日々が続いていた。

その年の秋ごろ、次に発行されるビックイシューを求め新宿にあるビックイシューの事務所に柳沢さんは向かった。するとある男性に話かけられる。「君さ、ダンス興味ある？ここに来たってことはホームレスでしょ。ダンス踊ってみない？きみみたいなホームレスも一緒だし」。その時柳沢さんは全く興味もなく、ただお金が欲しいためにビックイシューを売っていた。しかしその男性は諦めが悪かった。柳沢さんにしつこく、「どこの地域で路上生活をしているのか」などと聞いてきた。「とりあえず、５日後、戸山公園にきて」とだけ言って男性は事務所を後にした。「変な人だな、あんなに人に興味を持たれたのはホームレスになってから初めてだった」と、柳沢さんは驚きとともに、絡んできたその男性が頭から離れなかった。

５日後、指定された戸山公園に向かった。ホームレスで特にやることもなく、暇なため、向かった。ダンスに興味を持ったわけではない。戸山公園に到着すると、自分と同じホームレスが４.５人ほどいた。そして事務所で見た男性もいた。柳沢さんに気付き、「新しい仲間が来た」と、嬉しそうにその男性は言った。わけもわからず柳沢さんはなんの集まりか疑問を持った。「ソケリッサ」口を揃えてみんながそう言った。後から知ったがここに集まっているホームレスは、だいたいが

ビックシューの販売員であった。柳沢さんに事務所で話しかけた男性はこのソケリッサを作った代表のアオキ裕キさんであった。

ソケリッサとは、現役ホームレス及びホームレス経験者で構成されたダンスパフォーマンス集団である。「新人H ソケリッサ！」は、グループの代表である、ダンサー兼振付家のアオキ裕キさんが2005年に作ったものである。当時、新宿の路上で歌うストリートミュージシャンによってできた人だかりの横で、路上生活者が見向きもされず、お尻を出して寝ている光景を目にした。「この路上生活者の体が、隣のミュージシャンのように、人前で歌ったり踊ったりしたら、どんなに面白い景色が見れるだろうか。ぜひその景色を見てみたい」と思ったことから結成を決意したのが始まりであった。

柳沢さんは疑問に思った。なぜあんなにもしつこいくらい話しかけてきたのか、アオキ裕キさんに聞くと「事務所に入ってきたときの顔が上がっていた。目が死んでなかった。ホームレスの人とは思えないほどのオーラがあったから。その死んでない目で踊るダンスは世間に伝えられる。ホームレスにだって生きている意味、生きる希望、世間から排除された人の思いを、ダンスを通じて表現をしたらどうなるんだろう、どんな面白いことが起きるのかワクワクした」と、真剣な顔で質問を返せれた。

その言葉を聞いて、柳沢さんは「初めてあったにもかかわらず、こんなにも期待されている。私はただ、路上生活から抜け出したくて必死に生きていた。その思いが伝わったのかと思った。ダンスなんてやったことはないが、アオキ裕キさんの言葉が心に響いていた」。その日から柳沢さんは「新人Hソケリッサ」の一員になった。

２節　活動を通じて見えきたもの

アオキ裕キさんに声をかけられ、自分を認めてくれたことをいきに感じ、ダンスは未経験であったが、柳沢さんはソケリッサの一員となった。初めて戸山公園にいってソケリッサの他のホームレスたちと話す。そこには、柳沢さんのように、人間関係がうまくいかず、仕事を辞めてホームレスになった人、リストラになり、何もかもを失ないホームレスになった人がいた。中には、家族と一緒に暮らしていたが、重い病気になり、仕事もクビになり治った時には、仕事はない上に家族もいなくなっていたホームレスもいた。「みんな理由は違うが、地獄のような経験をして、ホームレスになっている。しかしその経験をくらい顔や悲しい顔で話してない。むしろ笑顔でいた。疑問に思った。自分のホームレスになった時系列をあんな顔で話すのは無理だ」。当時はホームレスの経験を笑顔で語る他のホームレスを見て、柳沢さんは違和感をおぼえた。その日は、ダンスを踊ることはせず、アオキ裕キさんや他のホームレスと話すだけで終わった。

解散間際、「次は、６日後場所は代々木公園で」と、アオキ裕キさんがホームレスたちに言った。すると一人のホームレスが「その日はいけないや」と言った。誰もその人にどうしてなんてかける人はいなかった。その帰りは、ソケリッサの一員である萩原さんと新宿の公園に帰った。そこで柳沢さんは「なんか変ですよね。ホームレスなのに踊るって、しかも今日に関しては踊ってもないし、みんなホームレスなのに自分が経験してことを自慢げに話していて。しかも次こない人も当たり前のようにいけないですって」。柳沢さんが言い出すと、「それがソケリッサだよ」と萩原さんはすぐさま返し、続けた。「みんなホームレスの自覚はあるし。集まって話すことが大事なんだよ。いかない日があったていい、自由なんだから」とまた笑顔で言った。その話を聞いて柳沢さんはますますソケリッサに興味を持った。

6日後、代々木公園に向かった。そこには前回

いたホームレスもいれば、新しいホームレスもいた。最初はまた、ホームレスと多くのことを話す。またみんな笑顔であった。柳沢さんも時より笑顔が溢れていた。柳沢さんがソケリッサに入って初めてダンスを踊った。他のホームレスやアオキ裕キさんに教えもらいながら１時間ほど踊った。周りの代々木公園を通る人たちは、ソケリッサの踊りは全く見ていない。ダンスを終わるとまたホームレスたちと話す。「次２週間後」とアオキ裕キさんは言う。柳沢さんはもう２週間後が待ち遠しかった。その帰り、また出会ったホームレスと帰る。「なんでソケリッサに入ったんですか」と聞くと、「なんでだろう、『新人H ソケリッサ！」という場所が、居心地がいいからかな」と、そのホームレスは笑顔で答えた。また笑顔であった。

それからソケリッサの活動がある日は、柳沢さんは基本的に参加するようになった。柳沢さんも「ダンスを踊ることよりも、そこにいたいと思えるコミュニティがある」と思い初めていた。毎回毎回いくのが楽しくて、前の夜はワクワクでなかなか寝つけないほどであった。「ダンスをみんなで踊ることもそうだが、なんだか落ち着く場所である。ソケリッサの人たちといると自然に笑顔になる」。自分がホームレスになった理由やホームレスになってから経験したことも、すっかり柳沢さんは自慢げにそして笑顔でみんなに話していた。ソケリッサの一員になってから３ヶ月弱、柳沢さんは「自分という人間はこういう人間です」と、ホームレスの経験やビックシューの販売を通して他のホームレスに伝えていた。それは柳沢さんだけでなく、ソケリッサに所属するホームレス全員が全員に伝えていた。つまり表現していたのである。

３節　ソケリッサという大きな財産

ソケリッサの一員になってから６ヶ月ほど経った。ビックシューを売ることが路上生活を向け出すための一番の近道だと感じていた柳沢さんは、踊るということにはそこまで関心はなかった。ダンスは踊っているものの、なんとなくでしかなかった。それでも月に１、２回あるソケリッサの集まりに柳沢さんはできるだけ参加していた。集まることで他のホームレスとの会話がはずみ、関わりあうことで、自分はこういう人間ですよと柳沢さんも自然に伝えられるようになっていた。

ある日いつものように柳沢さんはソケリッサの集まりに出かけた。そこにはアオキ裕キさんの姿しかなかった。そんな日もあるだろう。ソケリッサは仕事でもないし、部活でもない。また、やめたいと言っても止めることはない。そしてまた、戻ってきたいと言ったら何事もなく迎えるのである。稽古も強制ではない。休みたかったら休んでも構わないし、仕事に集中するために長期離脱することも可能である。ソケリッサの集まりでアオキ裕キさんと二人になるのは初めてだった。

「ソケリッサにだいぶ馴染んできたな。自分の生き様を伝えていて、他のホームレスたちのように笑顔が出てきたな」と、アオキ裕キさんは嬉そうに柳沢さんに語りかけた。「メンバーと一緒にいるのが楽しいから」と柳沢さんは返した。「その生き様をダンスにして、踊ればいいじゃないか。メンバーのホームレスに話しているようにダンスでも伝えられる。俺はホームレスかもしれないが生きている。こういう人間だぞって表現すればいいんだよ」。その言葉を聞いて柳沢さんは「世間から排除されて、汚いや酷い言葉をかけられることもあったそんな自分が、世間に生きていることの証明をするのは怖かった」と思わず弱音を吐いた。するとアオキ裕キさんは「一人じゃないだろ」と強く言った。「同じ苦しみ、同じ地獄をみてきた、味わってきたソケリッサと一緒なら怖くない。世間に伝えたい、俺たちホームレスだって生きていることを。生きる意味をそして希望を表現したい」と、柳沢さんは初めてそう思えた。

それから、ソケリッサの活動は集まって話すこともたのしみであったが、踊ることも柳沢さんにとっては大事なこととなった。公園で踊っているため、通りすがりの人たちは見ていく。ほとんどが素通りで見たとしても、一瞬かもしれないが、その人にも伝えたい、「俺も生きてる」ということをと、踊りをつうじて柳沢さんは表現する

2010年半ばごろ柳沢さんがソケリッサに入って初めて、いわゆるお客さんの前で踊る日を迎えた。その時の柳沢さんは「緊張はしなかった。だって僕たちに期待している人たちなんていないんだよ、いい意味でね。僕たちホームレスだって同じ人間である。ホームレスだからと言って関係ない生きる意味も希望もある。それを、ダンスを通じて伝える。ただそれだけ」と真っ直ぐな目で伝えてくれた。

ソケリッサに入り、何度も伝えてきた。ホームレスだって生きてること、俺はこういう人間であると、柳沢さんは世間に証明してきた。ソケリッサに入って5年ほど経った時、柳沢さんはソケリッサの活動には顔出さなくなった。誰も止める人などいない。ソケリッサはそういう自由な団体だ。なぜ辞めたかを聞くと「ダンスで生きていることや希望、俺はこういう人間ですと表現できた。ダンスでできたなら他のことでもできるんじゃないかなって思ったんだよね。ビックイシューを売るのだってそうだし、中には絵を描いて売っている人もいる。サッカーチームを作ってやっている人もいる。極端に言えば、アルミ缶集めだってそう。必死に生きているじゃないか。そうやってどこかで表現してる。ホームレスですけど何か。普通の人と変わらず生きてますよって世間に伝えてるんだよ」っと笑顔で話してくれた。

「ソケリッサに出会えたことは僕にとっての大きな転機となった。ホームレスにならなかったら出会えてないと思うと複雑な気持ちだね。早く元の生活に戻りたい気持ちしかなかった僕に、ソケリッサは安心してそこにいることができる、コミュニティであり、自立への近道にもなった。メンバーのみんなに会いたいと思ったら、一緒に踊りたいと思ったら、ふらっと集まれる場所。それが『新人H ソケリッサ』というパフォーマンス集団の真の姿じゃないかな」と柳沢さんは伝えてくれた。柳沢さんにとって「新人H ソケリッサ」との出会いそして活動は、生きる証明でもあり、ホームレスから抜け出していく大きな財産にもなった。

終章

1節　柳沢俊太郎さんの新たなる夢

ソケリッサについてのインタビューが終わり、実際に柳沢さんにダンスを少しだけ見せてもらうことできた。音楽はなく、派手な衣装でもない、裸足で淡々と踊る姿はまさにホームレスである人とは思えなかった。1分という短い時間であったが、生き様を感じた。まさに柳沢さんは生きていることを表現していた。「もう何年もやってなかったから、うまくできなかったね。でもやっぱり緊張なんてしない、周りの目も気にしないね。だって僕ホームレスかもしれないがきみと同じ人間だからね」と、柳沢さんは笑顔で返した。何年たってもその思いは変わらない。

そんな柳沢さんに今の夢はなんですかと聞いた。「今の夢か」と柳沢さんは一瞬沈黙した。その後、「地元である茨城県結城市で農家をやることだね。23歳で東京に出てきてから何も挑戦してこなかったからさ。こうやってホームレスになってしまったけど、元の生活に戻るために必死に生きてきた。ビックイシューやソケリッサに出会ってなければ、この挑戦もない。不思議だよね、人生何があるかわからない。ホームレスになったことは情けないけど、後悔はないね。挑戦するのに、年齢や性別、人種は関係ない。ましてはホームレスだからとかも関係ない、人間皆同じ挑戦してい

いんだ」と心のこもった熱い思いを柳沢さんは語ってくれた。「ホームレスから農家なんて面白いでしょ。農家をして元の生活に戻れたら、生きているかわからないけど母親に野菜食べさてやりたいんだ。それが今の夢かな」とも柳沢さんは続けた。

2023年12月2日、柳沢さんが売るビックシューを求めて、いつものように新宿駅から少し離れた中央公園に向かった。しかしそこには柳沢さんの姿はなかった。新たなる夢への挑戦に柳沢さんはもう向かっていた。

２節　柳沢さんの人生を通して見えたこと

柳沢さんのように表現するホームレスは何を、世間を伝えているのだろうか。本論文では、ホームレスである柳沢俊太郎さんの人生に焦点を当て、私自身が実際に柳沢さんにインタビューを通じて論じてきた。

一章では、柳沢さんがホームレスになるまでを見ていきた。柳沢さんは茨城県結城市で生まれ、母と兄、弟と暮らしていた。父は弟が生れてすぐに姿を消してしまった。家族４人で暮らしていたものの、年を重ねるにつれて、兄と弟より優れてないことが理由で兄弟との会話がなくなっていた。

高校卒業後工場で働いていた柳沢さんだが、ほとんど家には帰らずにいた。次第に母とのコミュニケーションもなくなっていった。家族での居場所すら失いかけていた。そんな中、23歳の節目となる歳に、何か挑戦できないかと思い、憧れていた東京に引っ越した。その時にですら母からは期待もされず呆れられていた。

東京ではアルバイト先で仲良くなったAと過ごしていた。Aは柳沢さんに東京の楽しさや大人の遊びなど多くのことを教えてくれた。まさに親友であり、柳沢さんにとっては大事な存在であった。しかし、そのAにお金を盗まれてしまう。親友であったAに裏切られたショックでアルバイトに行かない、家からも出ずにいた。そこから光熱費、家賃が払えず、公園で暮らす日々が続いていった。

親友に裏切られ、仕事をなくし、家を無くし、段ボールを引いて公園で寝てる日々が続いき気づけばホームレスになっていた。

二章では、柳沢さんがホームレスになってからのその後を見てきた。ホームレスになってすぐ同じホームレスであるBと出会った。Bにはホームレスが毎日生きていくために必要なことを教えてくれた。まさにホームレスになりたての柳沢さんにとってBの存在は大きかった。

公園にホームレスが原因で苦情が入る日々が続いた。そこでホームレスは公園にいられなくなったのはもちろん、持ち物なども駆除された。それが原因でBともそれっきり会わなくなってしまった。月日が経つにつれて、柳沢さんは何もかもどうでも良くなっていた。

路上生活が3年目の冬を迎えて際に、今まで味わったことのない苦痛に襲われた。その苦痛と地獄が元の生活に戻りたいという気持ちに火をつけた。

そんな中、ホームレスらしき人が雑誌を売る光景を見た。この光景との出会いが柳沢さんにとって大きなものとなる。ホームレスらしき人に話かけ、詳細を聞いた。ホームレスであれば誰で売ることのできる仕事であった。すぐに販売員になり、元の生活に戻るために必死に売っていた。そんなビックイシューとの出会いは希望の光であった。

三章では、柳沢さんがソケリッサに出会うところから活動までを見てきた。ビックイシュを熱心に売り続けていた頃に、ソケリッサと出会う。ソケリッサはホームレスからなるダンスグループであった。所属している全員がホームレスであった。ダンスには興味がなかったものの、ホームレスとの会話やコミュニケーションをとることが楽しくソケリッサの活動をしていた。

そんなとき、ダンスを通して生きていることを表現できることを知った。柳沢さん自身ホームレスであるが、人間であり生きている。その生きていることを世間に伝えられる。そのことを教えてくれたのはソケリッサであった。

ソケリッサに出会えたことは柳沢さんにとって大きな転機となった。早く元の生活に戻りたい気持ちしかなかった柳沢さんに、ソケリッサは安心してそこにいることができる、コミュニティであり、自立への近道にもなった。柳沢さんにとって「新人H ソケリッサ」との出会いそして活動は、生きる証明でもあり、大きな財産にもなった。

ダンスを踊っているホームレスや雑誌を売っているホームレスは、「俺たちはこういう人間である」、「俺たちだって生きている」ことを世間に伝えているのだ。

３節　個々の人間としての存在として認識されるために

「雑誌を売るホームレス」は、自己表現と生計の手段を結びつけている。彼らは雑誌の販売を通じて、巧妙なマーケティングや自身のストーリーを通じて、生計を立てつつ、同時にホームレスの現実に対する理解を促進している。これは、社会的な偏見や先入観に挑戦し、一般の人々に対して共感を喚起する手段である。

「踊るホームレス」は、アートとパフォーマンスを通じて感情やメッセージを伝えている。ダンスは言葉を超え、感情や経験を直感的に伝える手段となり得る。ホームレスが踊りながら、自身の苦境や希望を表現し、観客に対して無視されがちな彼らの存在に注意を喚起することを狙っている。また、これはホームレスの人々が抱える困難な現実に対する共感を促し、社会により包括的なサポートを求める手段でもある。

表現とは、様々な表現形式を通じて自身のアイデンティティを探り、社会的な問題に対峙する行為である。絵画、詩、音楽などの芸術を通して、ホームレスの個々の感情や人間性を強調し、同時に不平等や制度的な課題に対する批判的な立場を表現している。これは彼らがただ社会から助けられる存在としてではなく、個々の人格を持つ人間として認識されたいという欲求を反映している。

表現を通じて、ホームレスの方々は個別のアイデンティティを表現し、自身の独自性を示すことができる。彼らは単なるホームレスとしてではなく、個々の人間としての存在として認識される。表現するホームレスが採るアプローチは、彼ら自身の状況に立ち向かい、社会に対して異なる視点を提供することを目指している。

ホームレスの方々が単なる受益者としてではなく、自身の主体性を持ち、社会的な対話に参加する存在として位置づけたいという意志を示している。同時に、これらの行動は私たち社会に対して、単純なステレオタイプや偏見を超え、個々の人間としての尊厳を尊重する。そんな「表現するホームレス」が具体的に生きているか、単なるホームレスとしてではなく、個々の人間としての存在として、私たちはとられていく必要がある。

４節　同じ人間であり生きている

本論文では、ホームレス社会から抜け出すために表現しているホームレスの人生に焦点を当てた。とりわけ柳沢俊太郎さんはなぜホームレスになったのか、柳沢さんは、ホームレスとして社会でどのような状況に置かれ生きてきたのか、さらに柳沢俊太郎さんにはどのような思いがあったのかを具体的に浮き彫りにしていった。

本論文では、柳沢さんに焦点を当てていたため、他の新宿にいるホームレス、他のビックシューを売っているホームレスや他のソケリッサのメンバーには、言及することができなかった。かれらは柳沢さんと同じような思いをもって、ビックイシューを売ったり、踊ったりしているのだろうか

は、疑問として残されている。柳沢さんのようにホームレス社会から抜け出そうと、積極的に表現するホームレスは、ホームレス全体からすると少数派であろう。積極的に表現しないホームレスは、この論文では検討することはできなかった。

しかし、私たちが見えてないだけで、ホームレスの人々は必死に生きている。たとえそれは柳沢さんのように、ビックシューを売っている人や積極的に表現している人たちだけではない。新宿や代々木公園などにいる寝たきりのホームレスだってそうである。極端に言えば、歌舞伎にいる東横キッズもそうである。彼らも皆必死に生きている。我々と同じ人間である。

本論文を通じて少しでもホームレスに対するイメージや存在を近いものだと感じ、彼らたちも生きていることを感じてもらうことができれば幸いである。ホームレスは私たちと同じ人間であり、同じ世界を生きている。

【引用・参考文献一覧】

飯島裕子、2013、『ルポ　若者ホームレス』ちくま新書。

岩田正美、2007、『現代の貧困―ワーキングプア/ホームレス/生活保護』ちくま新書。

青木秀男、2010、『ホームレス・スタディーズ　排除と包摂のリアリティ』ミネルヴァ書房。

佐野章二、2010、『ビックイシューの挑戦』講談社。

佐野章二、2013、『社会を変える仕事をしよう』日本実業出版社。

鈴木文治、2012、『ホームレス障害者：彼らを路上においやるもの』日本評論社。

【引用・参考WEBページ一覧】

厚生労働省、2009、「ホームレス・ネットカフェ難民の実態調査について」、厚生労働省、（2023年11月12日アクセス、https://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/2r98520000004c72-att/2r98520000004ca0.pdf）。

厚生労働省、2023、「ホームレスの実態に関する全国調査（概数調査）結果について」、厚生労働省、（2023年11月10日アクセス、https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage_32790.html）。

ビックシュー日本、2023、「ビッグイシュー日本とは」、ビックシュー日本、（2023年12月1日アクセス、https://www.bigissue.jp/about/）。

【インタビュー・フィールドワーク】

2021年11月23日、後藤浩二さん、「地域生活支援ホーム・やまぶき舎」にてインタビュー。

2022年1月30日、後藤浩二さん、「zoom」にてインタビュー。

2022年11月25日、後藤浩二さん、「地域生活支援ホーム・やまぶき舎」にてインタビュー。

2023年10月25日、柳沢俊太郎さん、「新宿区立新宿中央公園」にてインタビュー。

2023年11月３日、柳沢俊太郎さん、「新宿区立新宿中央公園」にてインタビュー。

2023年11月10日、柳沢俊太郎さん、「新宿区立新宿中央公園」にてインタビュー。

2023年11月18日、柳沢俊太郎さん、「新宿区立新宿中央公園」にてインタビュー。